

因果関係の 複雑さと うまく付き合う

林 侑輝 (はやし ゆうき)

事例比較で大切なこと

前回は、私がここ数年取り組んでいる長寿企業の研究と関連させつつ、質的比較分析(QCA)という、近年注目が集まっている手法について言及しました。QCAを本格的に実行するには込み入った手順が必要になりますが、その背後にあるロジックは日常生活でも無意識に用いているものです。専門的には、19世紀の経済学者、哲学者のJ・S・ミルが体系化したので「ミルの方法」と呼ばれます。

テクニクです。なお、物事の因果関係を扱う際には、高校数学で登場する「必要条件」と「十分条件」を区別するとよいでしょう。結果が生じるために「最低限これが必要」と「これを満たせば十分」とでは意味合いが大きく異なるからです。

ミルの方法には複数のバリエーションがありますが、代表的なものが「一致法」と「差異法」で、それぞれ必要条件と十分条件を絞り込むのに役立ちます。QCAとは異なり、ミルの方法では第2回で述べた「因果複雑性」を捉えられませんが、一致法と差異法を段階的に行うことで、より深く議論する価値のありそうな観点を絞り込むことは可能です。

一致法の手順は次の通りです。
(1) 結果が似通った複数の事例を選出する
(2) その原因になりそうな仮説条件をリストアップする
(3) 仮説条件の中に、全ての事例で共通しているものを探す。

もし存在すれば、それ以外は必要条件の候補から除外できます。差異法の手順は次の通りです。
(1) 結果が異なる複数の事例を選出する
(2) その原因になりそうな仮説条件をリストアップする
(3) 特定の仮説条件だけが、結

果に対応するような組み合わせを探す。もし存在すれば、それが十分条件の候補です。ここで「商店街の活性化」の成功条件を探る架空の例を考えてみましょう。仮に、他の条件には規則性がないのに、「地域通貨を導入した事例では必ず成功、しなかった事例では必ず失敗」という規則性が確認できれば、それが十分条件である可能性が高いと言えます。

以上のように、分析者が関心を持つている結果が「起こった事例」と「起こらなかった事例」の両方を観察してこそ、比較分析は強みを発揮できます。ですから、成功例を取り上げて「成功条件リスト」を作るだけでは、方法的に言うって非常に心許ない分析と言わざるをえません。一致法により「必要条件ではないもの」を除去するだけでは、確度の高い「勝ちパターン」が見えてくるはずはないのです。

では、各事例について「仮説条件と結果の有無」をどのように定義すればよいのでしょうか。今回はこの点についてお伝えします。

(和歌山大学経済学部講師博士(経営学))

和歌山大学岸和田サテライト 受講生募集 [令和2年度 後期]

- ① 学部開放授業 開講科目 「子ども子育てと現代社会」
「豪雨災害とその備え」
- ② 大学院 開講科目 「租税法実務特殊問題」
「財政学特殊問題」
「管理会計論特殊問題」

今期はオンライン授業!

募集期間および登録・申請方法その他について岸和田サテライトホームページをご覧ください。

お問合せ先 ▶▶▶ 和歌山大学岸和田サテライト
〒596-0014 岸和田市港緑町1-1 南海浪切ホール2階
電話/FAX: 072-433-0875

岸和田サテライト 検索